

ピアノ導入期におけるソルフェージュ指導の試み

— 3度音程に着目して —

内山 尚美

1. はじめに

近年、保育者養成校への入学者はピアノ初学者の割合が多い。

しかしながら保育の現場では音楽活動の場面が多く見られる。音楽そのものを目的とする活動や、音楽を手段として用いる活動などさまざまである。そして保育者には子どもの音楽表現活動を支え育むために、綺麗な声で歌えることやピアノが弾けることをはじめとして、幅広い音楽能力が求められる。

短期大学部での保育士養成においては、入学して1年満たないうちに保育現場での実習がある。その保育実習や教育実習（幼稚園）に対する学生の不安の中には、「ピアノ」に対するものも大きい（杉山 2006, p.47）。また入学後約1年6ヶ月後には就職試験を迎えることになる。実習においても就職試験においても、依然としてピアノ演奏技術が必要とされている。従って本学のような養成校においては、いかに短期間にピアノ演奏技術を習得するかということが大きな課題となる。

ピアノ演奏には二つの要素が必要であると考えられる。一つは技術的な学習であり、もう一つは音楽理論などを学習することであろう。しかし音楽にはどんな初期段階の楽曲にも様々な音楽的要素が内包されている。永富(1981, p.67)は「ピアノの初歩は、楽典の勉強から入るわけで、楽典で次々と楽譜の読み方を習い、ピアノで練習をし、正しい表現を学んでいくのである。つまり、ピアノ教本の冒頭の部分は、ピアノを用いてソルフェージュの勉強をしているのに他ならない。」と述べている。

そして保育士養成校において求められるピアノ技術に必要な楽曲において、殊に保育の現場で使用されるような子どもの音楽のピアノにお

いては、3度音程が多用されているように感じる。したがって保育者を目指す学生に対し、3度音程の読譜訓練を行うことによってピアノ演奏における影響が表れるのではないかと推測される。

そこで3度音程に着目して、ピアノ技術に結び付けられるようなソルフェージュ指導の在り方について探っていきたい。

2. 学生の実態と意識調査

本学幼児教育学科でのピアノ初学者の割合は平成24年度入学生が41%、平成25年度入学生が55%、平成26年度入学生は30%である¹⁾。しかし、幼少期に短期間経験しただけの学生も『ピアノ経験者』に含んでいるため、導入期のピアノ指導を必要とする学生は、初学者の割合よりも実際は多く存在するのが現実である。

そこで本学幼児教育学科1年生82名に対して、ピアノレッスンに関する意識調査を行った。質問項目は以下の6項目であり、それぞれを5段階（1 楽 2 少し楽 3 普通 4 少し大変）で回答する形式である。なお、今回のアンケートではピアノに対する意識調査が主になるため、前述の実際には導入期のピアノ指導を必要とする幼少期に短期間経験しただけの学生も「ピアノ経験者」として集計している。

〈質問項目〉

- ① ピアノレッスンについて
- ② 音名を読むこと
- ③ リズム
- ④ 右手で弾くこと
- ⑤ 左手で弾くこと
- ⑥ 両手で合わせること

全体の調査結果〈図1〉と共に、ピアノ経験者〈図2〉、ピアノ初学者〈図3〉の調査結果を以下に示す。

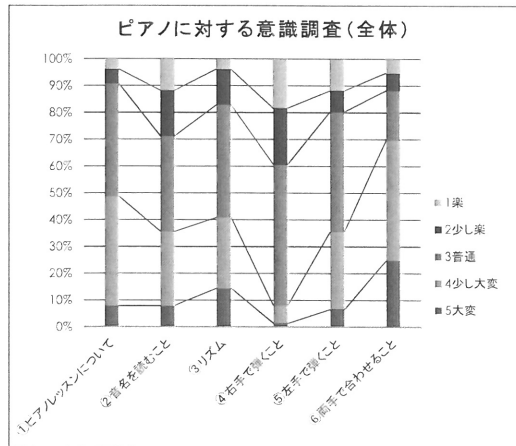


図1

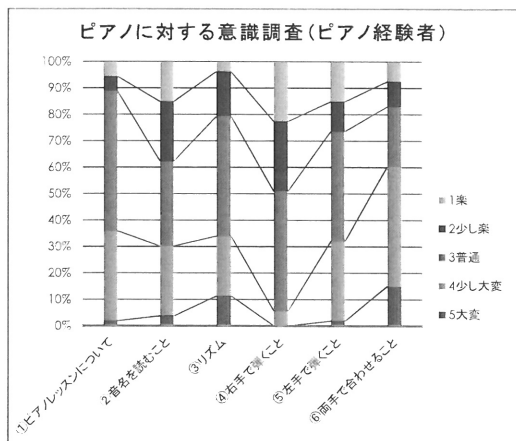


図2

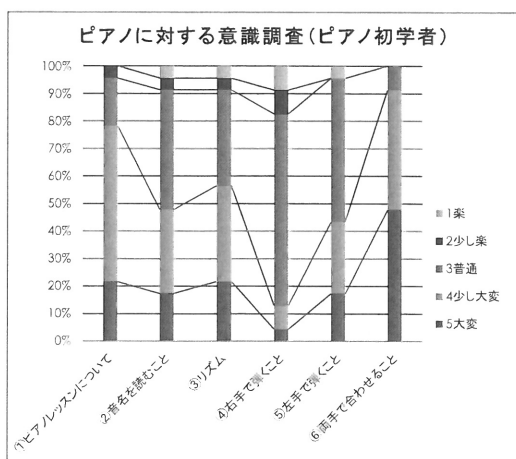


図3

この調査から「③右手で弾くこと」に対して苦手意識の低いことが分かる。ピアノ初学者の結果も同様であることからその理由として、保育者・教員養成課程におけるピアノの楽曲において右手がメロディーであることと、大半の学生の利き手が右手であることであろう。そして「②音名を読むこと」「③リズム」「⑤左手で弾くこと」について苦手意識（4少し大変 5大変）を感じている学生が全体の約4割いることが分かる。そして「⑥両手で合わせること」に関しては、苦手意識を持っている学生は約7割にも及ぶ。またピアノ初学者の苦手意識は「④右手で弾くこと」を除いて、すべての項目において非常に高い割合を示しているが、それらが「①ピアノレッスンについて」の項目における7割の学生の苦手意識に繋がっていると考えられる。

これらの項目の中で、ソルフェージュ指導と関連している項目に関しては「②音名」を読むこと「③リズム」であろう。

この結果に基づき、初学者と言えども大人である学生に短期間でピアノの演奏技術を定着させるために、今回は読譜訓練に焦点を絞り、読譜能力を育むための指導法を探っていく。

3. 実習での使用楽曲調査と分析

本学短期大学部幼児教育学科2年生の幼稚園実習（実習期間：平成25年11月18日～11月22日、平成26年5月26日～6月14日）で行われた楽曲（手遊び歌は除く）を、学生へアンケート調査し、音程の分析を行った〈表1, 2〉。

楽曲の傾向としては、園生活に関係した「朝の歌」「おかえりのうた」「おべんとう」「はをみがきましょう」が非常に高い割合で保育の現場で行われている。また実習が行われた季節の歌や行事の歌が多く実施されている結果となった。

これらの楽曲の調性は、C-dur、F-dur、G-durが多く、ほとんどが $c^1 \sim d^2$ の約1 oct. 以内の音域である。

そして音程の特徴は、重音において3度音程が最も多く、次いで4度音程が多用されている。また、順次・跳躍進行における音程では、1～3度音程が7割以上を占める。

このように保育の現場で行われている楽曲に

において推測通り3度音程が多く使用されていることが分かる。その理由としては、次のことが考えられる。

まず伴奏に関しては、主要三和音のリズム変形が多い。特にⅠ度の和音（主和音）は基本形、Ⅳ度の和音（下属和音）は第2転回形、Ⅴ度の和音（属和音）は第1転回形が使用されている。よってⅠ度の和音の場合は根音と第3音、第3音と第5音、Ⅳ度の和音は根音と第3音、Ⅴ度の和音は第3音と第5音、というように3度音程が表れる。

3度音程の楽曲における使用について歴史的にはルネサンスからバロックへの移行期、つまり旋法から調性が確立されたことによって出現している。イタリアの音楽理論家でありヴェネツィア楽派の作曲家であるツァルリーノ（Giuseffo Zarlino 1517～1590）は、あらゆる音程の中で3度音程が最重要であると考えた最初の人物であるといわれている。それ以降、機能と声を用いた楽曲が主流になり今日に至っている。

また旋律に関しては、ほぼ1オクターヴ以内の音域である。その音域内において、主音から属音に至る経過音的使用によって、主音と中音、中音と属音、または下属音と下中音、下中音と主音、というように3度音程が使用されることが多い。これはエルンスト・トッホによるところの、古典派の時代に確立された和声の軌道に従った旋律であり、和声で組み立てられた、即ち和声的な旋律なのであろう。

歌謡曲、ポピュラー音楽、童謡、所謂クラシック音楽と呼ばれている曲など、殆どの私たちの身の回りにあふれている音楽が機能と声に基づいた調性のある楽曲である。機能と声を用いた音楽は一般に受け入れ易く、親しみやすい。また主要三和音は機能と声の中でも最も基本的なもので単純明快であるために、子どもの音楽に多用されるのであろう。

表1：重音における音程

件数	曲名	作詞	作曲	右手使用音程数(重音)								左手使用音程数(重音)							
				2度	3度	4度	5度	6度	7度	8度	8度以上	2度	3度	4度	5度	6度	7度	8度	8度以上
42	おかえりのうた	天野燦	一宮道子		4	4							38	6					1
42	朝のうた(おはよう)	増子とし	本多鉄磨	2	1	1		2					9	1					
25	おべんとう	天野燦	一宮道子		1			2					11	1		1			
15	はをみがきましょう	則武昭彦	則武昭彦									1	5	1	1				4
13	まつぼっくり	広田孝夫	小林つや江																
13	さよならのうた	高すすむ	渡辺茂		15	3		12				1	47	14	8				
11	どんぐりころころ	青木存義	梁田 貞		4	2	1						8						
11	かたつむり	文部省唱歌																	
9	ののさま	三橋あきら	本多鉄磨		7	2	7	5				1	5	1	2	2	1	1	
9	とけいのうた	筒井敬介	村上太郎		5			5					5	1	1				
9	おもねをはりましょう	不詳	不詳		1	1						2	32			9			
8	むすんでひらいて	不詳	ルソー									8	69	5	8				
7	Good morning to you(Happy Birthday to you)												2		2				
6	やきいもグーチャーパー	阪田寛夫	山本直純		4	4				9		8	13	6					4
6	七夕さま	権藤はなよ、林柳派	下総皖一	2	28	2	1						2		4	2			
5	山の音楽家	水田詩仙 訳詩	ドイツ民謡		21			7											
5	もみじ	高野辰之	岡野貞一																
5	きのこ	まど・みちお	くらかけ昭二	15	15														5
4	グッドバイ	佐藤義美	河村光陽		5	1	7			2			31	4	2				4
4	おはようのうた	高すすむ	渡辺茂		9		4						25	6	6				
4	大きな栗の木の下で	不詳	イギリス民謡									2	29	2	2				

表 2：跳躍進行における音程

件数	曲名	作詞	作曲	右手使用音程数(順次・跳躍進行)										左手使用音程数(順次・跳躍進行)									
				1度	2度	3度	4度	5度	6度	7度	8度	8度以上	1度	2度	3度	4度	5度	6度	7度	8度	8度以上		
42	おかえりのうた	天野蝶	一宮道子	19	24	9	4	1					51	12	16		11	6		3			
42	朝のうた(おはよう)	増子とし	本多鉄磨	9	15	11	4				1		1	4	12	5	17	6		4			
25	おべんとう	天野蝶	一宮道子	17	17	12	2	1	1				1	3	19	4	20	6	1	3	1		
15	はをみがきましよう	則武昭彦	則武昭彦	2	19	8	5							16	13	3	8	1	2	1	1		
13	まつぼっくり	広田孝夫	小林つや江	18	7	13	1	3	1					4	19	9	19	8	2	2			
13	さよならのうた	高すすむ	渡辺茂	42	77	22	7	2	4				93	7	32	13	37	14	3	6	1		
11	どんぐりころころ	青木存義	梁田 貞	18	31	11	2	3	1				2	22	3	8	4	1		6			
11	かたつむり	文部省唱歌		11	16	9	2							2	12	4	10	1		15			
9	ののさま	三橋あきら	本多鉄磨	14	18	2							1	8	4	3	1	1		1			
9	とけいのうた	筒井敬介	村上太郎	24	22	14	8	2	1		2	3	7	22	12	10	17	4		3			
9	おむねをはりましよう	不詳	不詳	23	24	6	1		1		1		59	4	25	1	24	3		8			
8	むすんでひらいて	不詳	ルソー	17	34	4		2					105	26	1								
7	Good morning to you (Happy Birthday to you)				16	7	3	1	2		1			8	11	11	4	3		2			
6	やきいもグーチャーバー	阪田寛夫	山本直純	16	38	11	2	2	2		2	2	11	7	14	17	5	2	7	15	8		
6	七夕さま	権藤はなよ、林柳派	下総院一	33	12								9	10	10	3		1					
5	山の音楽家	水田詩仙 訳詩	ドイツ民謡	26	42	3	7	1	2		1		10	3	3	9	6						
5	もみじ	高野辰之	岡野貞一		42	10	7	1					4	4	15		8						
5	きのこ	まど・みちお	くらかけ昭二	86	37	12	10	8	5		1		18	14	2	7	7	10		2	2		
4	グッドバイ	佐藤義美	河村光陽	10	40	49	7	3	2		1		31	8	17	7	15	9		8			
4	おはようのうた	高すすむ	渡辺茂	20	20	11	6	2					46	10	5	4	2						
4	大きな栗の木の下で	不詳	イギリス民謡	12	14	8	3	1					33	16	3								

4. 本学（東海学院大学短期大学部幼児教育学科 1 年）での取り組み

(1)「譜読みトレーニング」の取り組み

前項の使用楽曲調査からも 3 度音程が保育の現場で使用されている音楽に多いことが分かる。この 3 度音程を 2 回積み重ねることにより、5 度音程（主音と属音、もしくは下屬音と主音）という楽曲において重要な音程になる。保育の現場で使用されている楽曲に多用されている主要三和音は、この 3 度音程と 5 度音程によって成り立っていると考えても良いだろう。

よって 3 度音程を楽曲の中で視覚的に捉えて素早く譜読みすることによって、楽曲全体の譜読みがスムーズに行えるであろう。そして 3 度音程がスピーディーに行えることにより、次の 4 度音程、3 度音程に付随する 5 度音程もスムーズに譜読みできるようになるであろうと推測される。

そして本学では、幼児教育学科 1 年生において「幼児音楽 I」が前期に開講されている。授業内容は「ソルフェージュ」と「ピアノ実技」

である。

今年度この「幼児音楽 I」の授業「ソルフェージュ」において「譜読みトレーニング」と称し、譜読みプリント(図 4)を行った。譜読みトレーニングの実施期間は、音楽理論として「譜表と音名」を学習した後から開始し、前期期間中に合計 8 回実施した。「譜読みトレーニング」の内容は高音部譜表・低音部譜表にランダムに書かれた音のイタリア音名をカタカナで答えるものである。最初の 10 問は、高音部譜表で中央ハより 3 度ずつ上昇していくパターンで毎回同じ問題を設定した。11 問目以降は 3 度音程を中心としたランダムな音程を出題し、制限時間は 30 秒で行った。

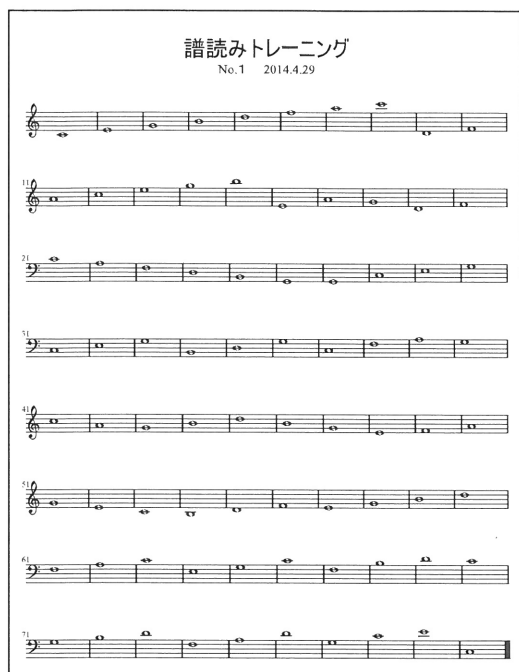


図 4

(2)「譜読みトレーニング」の取り組み結果と考察

「幼児音楽Ⅰ」受講生は本学幼児教育学科1年（平成25年度入学生）82名であり、そのうちピアノ経験者は58名、ピアノ初学者は24名である。

「譜読みトレーニング」の平均点推移は(図5)のとおりである。

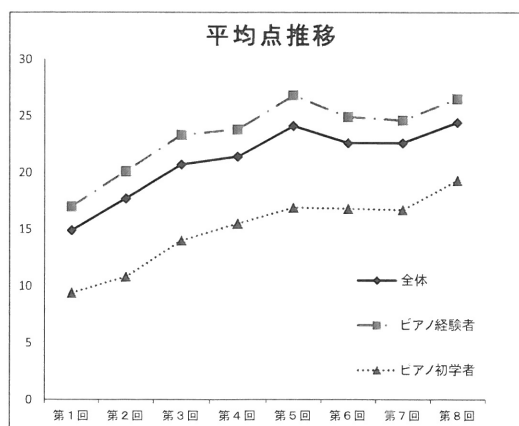


図 5

このグラフより、「譜読みトレーニング」の回数を重ねるごとに正答数が上昇していること

が読み取れる。最終回の平均点は初回よりも9.5点上昇している。そして注目すべきは、ピアノ初学者の最終平均点がピアノ経験者の初回平均点を上回っていることである。また、平均点推移グラフにはプラトーと思われる状態が見られる。この時期にピアノ経験者が一時的に平均点の下降を見るが、初学者には下降現象はほとんど見られず、わずか0.1点である。

読譜力に関して、呉（1991, p.149）は「音程を瞬間的に視覚でとらえることは、読譜のための重要な要素の一つだといえます」と述べている。この「譜読みトレーニング」によって3度音程の読譜に慣れ、視覚的にも3度音程を捉えることが出来るようになったのではないだろうか。よって、読譜速度が上がり、ピアノ演奏における読譜に必要な所要時間がより短時間になったのではないだろうかと考えられる。

また「譜読みトレーニング」最終回の後に、ピアノレッスンに対する意識調査を行った(図6)。結果として、「譜読みトレーニング」を行ったことによって、「読譜みが楽になった」「少し楽になった」と答える学生が7割を超えている。特にピアノ初学者においては8割以上がこのような答えをおり、多くの学生に読譜に対する前向きな意識変化があったと考えられる。

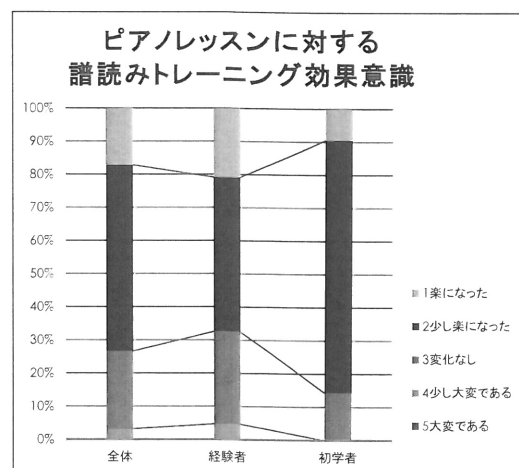


図 6

そして音楽（特に演奏）は、時間芸術であるがゆえに上達状況が感覚による自己判断に委ねられる傾向が大きい。とかくピアノ初学者にお

いては、明確な目標基準と現地点での自分の到達度が分かり難いこともあるために、なかなか学生自身の目標達成度が感じられにくいのではないかと考えられる。

また、ピアノ初学者の学生はピアノを習い始めた当初と比較すれば、徐々に上達していると自己認識出来る。しかし周囲のピアノ経験者の演奏を耳にすることが多く、それが大まかな目標基準にはなるものの、常に自分の演奏を比較することになるため、どうしてもピアノに対する意識面において劣等感が拭い切れない感がある。

それに対して「譜読みトレーニング」は、点数として視覚化され明確になる。そして回を重ねる毎に上昇する得点により、音楽能力の向上として自己認識することができ、それが苦手意識の薄れや自信に繋がっていったのではないだろうかと考えられる。そして「学習」という場面においては、心理的な影響力が強く作用する。今回は、それがピアノレッスンに対して前向きに取り組めるようになるのではないだろうか。

5. 今後の指導に向けて

保育者養成校の役割として、保育者としての基礎知識・技術を育むことと同時に就職指導も大きく担っている。

その就職試験内容を調査することによって、受験生に求められる力や保育者養成校に求められる授業内容の在り方や方向性を改めて知ることが出来よう。

そこで平成26年度採用就職試験（幼稚園・保育所）を受験した本学2年生に対して、就職試験内容のうち音楽に関する事柄をアンケート調査した〈表3〉²⁾。

表3

内 容		公立幼保 (全4園)	私立幼保 (全34園)
バイエル		2	10
童謡弾き歌い	任意の曲	0	27
	指定曲	3	4
楽器演奏(ピアノ以外)		0	1
初見視奏	ピアノ	0	3
	鉄琴	0	1
	リズム打ち	0	6
新曲視唱		0	1

就職試験内容アンケートによると、相変わらずバイエルの出題傾向が高い。その殆どが80番以降から課題曲として数曲指定され、その中より当日1曲指定されている。

バイエルに関しては、明治の音楽教育黎明期に伊沢修二が音楽取調掛としてアメリカからメーソン(L.W.Mason 1818~1896)を招聘した際に持ち込んだエチュードとして知られている。それから日本ではピアノ初学者のテキストとして広く使用されているが、賛否両論がある。実際のところ、保育士試験の音楽実技にも課題曲として使用されていたことがあった。しかし保育士試験が平成16年に全国統一問題となつてからは、バイエルは童謡の弾き歌いに替わることとなり、姿を消している。就職試験の課題曲として未だバイエルが出題されていることは、その名残りなのであろうか。

就職試験として出題されている童謡弾き歌いの指定曲においては、試験日の季節に因んだ童謡が出題されている。任意の曲の場合は、学生自身の実力差ははっきり表れる。保育現場のニーズとしては、難しい伴奏ではなくてもきっちり最後まで弾き歌いが出来ることを望まれているようである。

また初見視奏(ピアノ)としてその季節のいわゆる定番の童謡が出題されるケースや、事前連絡なしで「行進曲」を出題されたり、童謡弾き歌いで演奏した曲で雰囲気を変えた演奏を弾くように出題されたりすることもあった。これは課題曲だけではなく、学生の実践力としての音楽的な実力を試すものであろう。このような就職試験内容は刻々と変化している。平成27年度採用においては、いわゆる定番の童謡による初見視奏が出題されるケースが増加している。

しかし就職試験がどのような形態に変化しても、読譜のスピーディーさと苦手意識の克服が課題曲の余裕を持った演奏や初見視奏対策に繋がることが推測できる。また今後も就職試験の出題内容や出題形態に変化があると考えられるが、保育者として求められる音楽能力には大きな変化は生じないであろう。よって3度音程の「譜読みトレーニング」は、保育者養成校におけるピアノ導入期のソルフェージュ指導として有効

的ではないかと考えられる。

日本では、ソルフェージュは読譜と結びつけて考えられることが多い。しかし外国のソルフェージュは日本とは習得順序が逆であり、耳と体から始めてやがて頭へ、という様に感覚から論理的思考へ繋がることによって「音のイメージ」を成立させるものである。国安愛子は日本の読譜を結びつけて考えられがちな状態に対して警鐘を鳴らしている。しかし短期間でピアノ技術を定着させるためには、感覚による教育と同時進行で論理的思考の教育が必要である。

今回は「譜読みトレーニング」という形のソルフェージュ指導上での3度音程の読譜、つまり「机上での音楽能力」に対する検証である。実際学生に対して求められている音楽能力は、保育の現場で生かすことが出来る力、つまり子どもたちの音楽表現をサポートできるような音楽実践力である。

この「譜読みトレーニング」で育むことの出来た読譜力と軽減された苦手意識を、どのように実践力のひとつであるピアノ実技と結びつけるかが今後の課題である。

付記：この原稿は全国保育士養成協議会第53回研究大会でのポスター発表「ピアノ技術に結びつけるソルフェージュ指導—3度音程に着目して—」に加筆・修正したものである。

【文献】

- エルンスト・トッホ(1953)『旋律学』武川寛海訳
音楽之友社.
- 上沼八郎(1962)『伊沢修二』吉川弘文館.
- 国安愛子(1979)『リズム教育』北大路書房.
- 小林美実編(2008)『こどものうた200』チャイルド本社.
- 小林美実編(2012)『続こどものうた200』チャイルド本社.
- 呉暁(1991)『ピアノの上達はソルフェージュから』音楽之友社.
- ジャック・シャイエ(1968)『音楽分析—ギリシャ旋法から現代音楽まで—』藤田幸雄・若桑毅共訳 音楽之友社.
- 杉山喜美恵(2006)『実習事前指導におけるテレビ会議システムの利用』東海女子短期大学紀要第32号 東海女子短期大学.
- 外崎幹二・島岡譲(1958)『和声の原理と実習』音楽之友社.
- 永富正之(1981)『最新ピアノ講座3 ピアノ初歩指導の手引I』「第4章 ピアノとソルフェージュ」音楽之友社.
- 西原稔(1995)『ピアノの誕生—楽器の向こうに「近代」が見える』講談社.
- 武藤幹雄(1978)『Giuseppe Zarlino「音楽論」研究—「4声作曲法」、「平行進行」、「3度音程」』音楽学24(2) 日本音楽学会.

【脚注】

- 1) 平成24年度入学生69名、平成25年度入学生60名、平成26年度入学生82名に対して、音楽経験とピアノレッスンに対する意識調査のアンケートを実施した。なおアンケート実施時期は、平成25・26年度入学生は平成25年10月、平成26年度入学生は平成26年5月に実施した。
- 2) 調査期間は平成25年10月から12月末日、調査内容は就職試験内容のうち音楽に関するものに限定した。調査対象園は公立保育園(岐阜・愛知・三重)4園と私立保育園・幼稚園(岐阜)34園である。